

# 文化高知

2002年3月 NO.106



「エサクウカラスダタズ」

石井葉子

〈もくじ〉

ひと・出会い・みな土佐文化	小澤幹雄	2
学びに年齢制限なし	津曲裕次	3
『風伯』との十五年	南北	4～5
「風」がもらった宝物	中村早智	6～7
2002年高知を駆ける、馬踏飛燕②	長山昌広	8～9
よくばりな「子リス」を卒業して	松田雅子	10～11
上林暁生誕百周年に寄せて	野並 浩	12
音楽と私—社会と学校と音楽とともに—	川田弘人	13
風俗歳時記・風伯		14～15

# ひと・出会い。 みな土佐文化

小澤幹雄

高知にお世話になってまもなく三年になろうとしている。東京→青森→仙台→東京→上海→東京という転勤ルートで馬齢を重ねてきた私であるが、南国高知はこれまでにないエキサイティングな地である。

あまり酒の飲めない私を氣遣ってか、「土佐の酒文化には氣をつけろ」とありがたい(?)忠告をもらって、高知空港に降り立ったのが、おとしし六月。挨拶回りの会話のなかでも「局長、お酒の方は？」というお尋ねをいただく。競馬でいえばパドックの顔見せ、相撲では新弟子検査、わたしの緊張感が高まるばかりだった。

その瞬間はすぐにやってきた。なみなみとつがれた歓迎の大杯が差し出されたのである。すぐに目に浮かんだのが「赤岡のどろめ祭り」の光景だった。高知は初めての地である

が、一升酒を見事に飲み干し、大杯を空にかざす男の勇姿は、報道カメラマンだった私に「土佐の高知」を強烈に印象づけたカットである。……さて、である。意を決して大杯に挑んだ私は、だんだん大きくなる掛け声と拍手に励まされて、乗せられて、なんとあの「キメのカット」まで到達したのである。

「そんな生真面目に飲み干さなくても大丈夫。助っ人はたくさんいるから」とひと曰く。「助っ人」のひとことに込められた気持ちの深さと幅の広さがそこにあった。からだの隅々まで、心地よさがしみわたった夜であった。私は日曜市を歩くのが好きだ。追手筋を東から西へ高知



大杯を飲み干すどろめ祭り

城に向かって歩くのが気持ちいい。高知のあふれるような季節感や旬が並び、おばさんたちの笑顔と土佐弁が野菜や果物の新鮮さをよりひきたっている。

「徳谷トマト」、ちいさなトマトにつけられた値段に? トマトがルビーのように見えてきた。そんな私の顔をみたおばさんが味見を勧める。これがトマトかと思うようなフルーティーな味。その隠されたエピソードを教えてもらい納得。

そうそう「うこん」が肝臓にいいと教えてもらったことを思い出した。あしたのために買っておこう。

青森の駅前魚菜市場、上海の自由市場も楽しかった。その土地を知るのに「市場」がいちばんである。春夏秋冬、市場にはかけがえのない何かがある。

風土や歴史、生活様式など人々の生き方は、永きにわたってその地方の文化を育み、またあらたな時代を重ねていく。現代の情報化社会はともすれば画一的な状況に陥り易い。それだけに私たち地域放送局の果たすべき使命と役割は大きい。

NHK高知放送局はことし三月二十二日、開局七十周年を迎える。四国で最初にできた放送局である。放送の技術革新は急ピッチで進み、衛星デジタルハイビジョン放送もすでに始まっている。地域放送のデジタル化、ハイビジョン化も近い。

「ひと・出会い・みんな土佐文化」地域文化を大事に、そして全国発信にどんな挑戦したい。

私たちは、地域にとってかけがえない元氣あふれる放送局をめざして、これからも地域とともに歩んでゆきたい。

（おざわみきお/NHK高知放送局局長）

# 学びに年齢制限なし

## なし

津曲裕次

「文化高知」第97号(二〇〇〇年九月号)に古河物流社長桐村晋次氏の「社会人大学院物語」の話がある。桐村氏は筑波大学の夜間大学院修士課程で学ばれ、そこでの社会人学生と真剣な学びに感動された。私は同じ時期に筑波大学の夜間大学院に教員として勤務していた。桐村氏が在籍したカウンセリング・コースに並んでリハビリテーション・コースがあり、そこにも三十名近い社会人学生が学んでいた。その学生も二十歳代から五十歳代まで、看護婦、福祉施設職員、公務員、教師、大学教授など多士済々であった。

桐村氏が学んだ筑波大学大学院修士課程教育研究科カウンセリング専攻が開設されたのは平成元年のことである。私は、その開設時から専任教員として勤務し、平成十年、県立

高知女子大学に赴任した。着任に際し、橋本知事に、高知でも社会人大学院を立ち上げたいと話した。そこで、まず、高知女子大学社会福祉学部では、その発足時から社会人対象のリカレント講座をスタートさせた。ここでは毎年五講座程度が開かれ、毎週一回、年間八回程度の連続講座が開かれている。既に四年、合計すれば百人を超える受講生が出ている。この中には、現職の公務員、施設職員、看護婦、保健婦など、県内の保健・福祉の第一線で活躍している人達も、熱心に通って来ている。

さらに、平成十三年度から高知女子大学として社会人対象の修士課程人間生活学研究科と博士後期課程健康生活科学研究科を発足させた。これは、必ずしも社会人でなくても入学できるが、実際の講義と論文指導

は土曜日となっており、社会人に対応した仕組みとなっている。平成十三年度に第一期生が入学したが、社会福祉領域では修士、博士とも全員が社会人である。この中には福祉施設職員、公立学校教員、保健婦、大学教授、公務員など、筑波大学の夜間大学院と同じである。

これらの院生が極めて熱心で、教員や学生に大いなる刺激となっていること、自らの仕事に生きるテーマと関心を持ち続けて自己啓発に努めていることなど、どこに出しても遜色のない学生生活を送っている。惜しむらくは、大学の教員の意識が社会人対応に切り替わっていないこと、また、事務体制が十分でないことなど、まだまだ問題も多い。しかし、こうしたことは筑波大学でもあったことで、お互いが善意をもって努力

していけば、早晚解決できることである。もっとも、事務体制だけは善意では片づかないので、大学当局及び設置者の真剣な対応が必要である。私が、定年前に高知女子大学に赴任したのは、県立大学として、地域に密着した研究と教育がしたいと思ったことであつた。その一つが社会人大学院であつた。それが叶ったのは、ひとえに大学当局及び設置者のお力に依るところが大きい。しかし、生んだだけでは育たない。これからも独り立ちするまで、しっかりと育てていただきたい。そのことによつて、高知にも新たな文化が生まれるのではないだろうか。

（つ magari ゆうじ / 高知女子大学 特任教員）



# 『風伯』との十五年

南北

職務命令から始まった

『風伯』に書いてみないか、と言われたのが一九八七年のことだった。言ったご本人が職場の上司だった方なので、これは「依頼」ではなく「職務命令」だと受け止めた。

以来十五年、その職場から退職後も職務命令はなお生き続け今年の一ヶ月で二二回目の掲載となった。最初原稿を書く前に真つ先にしたこと、は、風伯の意味を辞書で調べることだった。浅学の徒としてはこれが風の神を指すことをここで初めて知ったものだ。

先ず方針を決めた。風の神ならば爽やかな風でありたい。湿っぽい風、威猛高な風、そんなのはごめんだ。次に香り高い芸術文化は似合わない

から取り上げないことにした。

演歌はテーマとしてもオペラは除外する。『鬼平犯科帳』はあっても『罪と罰』は無い。等身大の私の視線に合うものだけにしよう。

こうして風の神に乗せてささやかにシャボン玉を飛ばす営みが始まった。最初のころは年に一回から二回、逆に年間一度も注目の無いこともあった。原稿の締め切り日も様々で一か月先のこともあれば一週間しかくれないことから、最短では二日後という場合すらあった。どうもこれらは他の執筆者の都合で生じた穴埋めとしての注文であつたらしい。

だが私はむしろそれを光栄に思つた。いつでも御用命に応じますというのは芸術家ではなく職人の領域で話だ。私は孤高の芸術家でも、誇

り高い文化人でもないのだから。

コラムって何だろう

そのころの職場で私が文章を書くといえ、上司達の為の草稿を用意することが主だった。上司のタイプに合わせて書き分けるのが技術なのだが、その反面、この仕事は上手くゆけばゆくほどストレスが増大する側面がある。自分の文章が書きたくなつてくるのだ。だから、たとえ年に一、二回であつても、自己回復という点で風伯は有難い機会であつた。

最初に迷つたのは、コラムとは何かということだった。通常は囲み欄で時評的なものを指していると思うのだが、現在コラムニストの肩書きを多用している双壁である中野翠や泉麻人の書いているものはこの定義

はその中からの一編。



遠くまで行く人のために

昭和十年代に市内を走っている西行き電車のほとんどが蛸橋止まりで、伊野行きはごくわずかだった。小さな車体に加え他の交通手段に乏しい時代だからどの便も沢山の乗客がいた。満員になると降りる客がいらない限り停留所に乗客が待っていても通り過ぎた。

まだ幼児だった私が母に連れられて年に何回か、母の実家のあつた菜園場近辺まで旭町から往復したのも

電車だったのだが、帰りに際して母は伊野行きの電車が来ると決まって次のにしようと言つた。寒い冬などは早く暖かい車内に入りたいのに、これは辛かった。不服そうな私に母は、自分達は蛸橋行きでいいがもっと遠くに行く人が満員で乗れなくなつたなら気の毒だろう、と言つたものだ。

自分で車を走らせるようになって四十年近くになるが、その車の運転で自身に科しているルールが一つある。それは、運転を職業とする人々の車、バスやタクシー、営業用トラックなどには極力道を譲るということだ。それはこの人達が母の言った「遠くまで行く人」なのだから。そんな心がけでいると、他の車にもできるだけ譲る運転になるから不思議なものだが、ついに私の車に乗ることなく早く逝ってしまった母なら、そんなことは当たり前ぞね、と言うことだろう。

だが例外的に断固として譲らない

相手もいる。それはパチンコ店の駐車場に出入りする車だ。少しばかり待たせても罰は当たらない。

もう止めなさい症候群

この原稿に限らず私が清書用に使っているのは、ワープロ以前の機器で電子タイプライターと称するものだ。購入以来十八年間使い続けてきた。それが、昨年の五月号の風伯の原稿を清書した際、最後の一字を印字し終わった瞬間、パタリと動かなくなった。文字通り精根尽き果てたという感じの初めての故障だった。またこの機器はワープロと違ってレイアウトがほとんど出来ない。文字や行の間隔が一定の範囲でしか選べないのだ。だからその規格に合う原稿用紙を探すしか方法がない。

様々なメーカーの用紙を験した結果、ただ一種類だけが何とか合致した。紀伊國屋製のK6という銘柄だ。この用紙を手に入れるには、四国では松山市の紀伊國屋書店まで行かな

ければならない。同店に立ち寄る度に五階の文具売場で買って帰るようになった。

ところが、昨年末に数か月ぶりに訪れて啞然とした。五階フロアから文具売場は影も形も無くなっている。こういった現象が続くようになってきたことは、どうやら風伯への寄稿もここらでもう止めなさいという忠告であるような気がし始めた。

今年から文化振興事業団は文化プラザ「かるぽーと」の運営を行う新組織となる。「文化高知」も発展的にリニューアルされることになるだろう。そこに執筆する方々は、それぞれその母の言っていた遠くまで行く人達だ。私はその電車には乗らずゆっくり歩いて行こう。十五年間のご縁を思い出しながら。

この原稿のために風伯のバックナンバーを調べて下さった編集部のYさんに感謝しながら。  
(なんぼく／引退するコラムニス)

# 「風」がもらった宝物

中村早智

vocal group Breeze (ボーカルグループ ブリーズ、男声・女声二の計四名)——私たちは東京を中心に活動をしながら、少しずつ全国各地に歌いに飛んでいる。そして昨年十二月中旬、Breeze 四国初上陸。やって来ました初高知。初めて会う人々、初めて歌う場所。たった二日間の滞在だったけれど、こんなにも忘れられない「宝の時間」になろうとは——。

高知第一日目、昼は細木ユニティ病院、夜は筆山にあるギャラリ「自由広場」、二日目は、昼は石川記念病院、夜は赤岡町の古い蔵。この四つの会場で歌わせていただき、たくさんの温かい思いにふれることができた。高知ではほとんど無名の私たち Breeze のライブ。しかしどの会場にもたくさんの人々が足を運んでくださった。

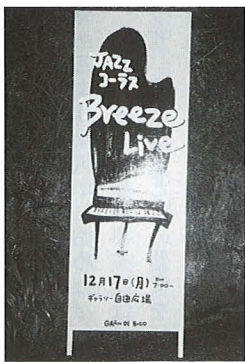
私たちにとって病院コンサートというのはまず初めての体験。ドキドキと胸が高鳴りながら会場入りをすると、すでに着席している患者さんが数人。音響セッティング、サウンドチェックを始めると思わずに声をかけてくださる方、ジッと静かに眺めている方もいた。そして続々と会場に集まってくださった患者さんの年齢は実に様々。

演奏が始まる——。二つの病院で同じようにとても驚いたのは皆さんの音楽を聴く集中力の凄さ。これが本当にスゴイ。少しでもこちらが手を抜いたら、気を緩めたりしたら（日頃、手を抜いている訳では決してないのですが）たちまちに見透かされてしまっている……。感性が物凄く豊かなのでしよう。感じるままに手を叩いたり、一緒に歌ったり（意外と素直に出来そうではないんですけど、これ）。何よりも誰よりも私たちが楽しんでしまった。そして大切なのは、ああ、そう、この感じだ。と私たちの内面に大きな大きな響きを返してもらったことだ。

高知最初の夜はギャラリ「自由広場」。高知市を一望でき、ギャラリだけあって何とも個性的な楽しい空間。手作りのたて看板に、料理等も手作り。すべてが手作りの空間は五十人ほどの人でピッシリ埋め尽くされていた。高知で活躍されているミュージシャンの方々も出演し、これまたいろんな音楽が飛び出す楽



『自由広場』で行われたライブ



しい時間となった。ここでも、初めて聴く私たちの歌声に、皆さん静かに耳を傾けてくださった。静かに、でもどんどん膨らんでいく熱気につられ、自分たちの声もどこまでも伸び続けていくような……そんな不思議な感覚を味わった。そして演奏終

了後、皆さんとの楽しい会話の時間。高知発祥のよさこい祭りの話とはとても興味深いものがあった。

翌日、最後の夜は日本で二番目に小さな町だという赤岡町。何でも、高知空港の敷地面積よりも小さいというこの町は一体どんな所なのか——。想像がつかず、物凄く興味が湧

いた。「もうすぐ赤岡町だよ」の言葉と同時に到着。ちょっと先に見える通りの向こう側はもう違う町だという。確かに小さい。そして走っていた原付のナンバーを見て「ああ、赤岡町だ」と再確認。町並みはとても古く、一つ一つの建物に何ともいえない風情があった。古い

ライブ模様となって幻想的な感じさえた。寒い師走の夜、約百五十人もの方々が集まってくださり、きつといつもは静かであろう古い蔵はとも賑わった。

コンサートは二部構成、この季節こそそのクリスマスソングももちろんおりませで。コンサートが進むにつれ、ステージと客席との距離がジワジワ縮まっていく。この瞬間が、何

た。この人たちの一途な思いもさらに響きを増幅させていたのだなと改めて感じた。

今生きている私たちにできること——時間の経過の中で生まれた様々な「よいもの」、そのよいものを残し伝えながら何かを生み出していく……。

木造で味わい深い瓦屋根の銭湯、民家の塀、床屋さんの看板、街灯……、町は本当に映画のセットのような規模だが、長い時間が作り出した匂い、決してセツトにはないものが沸き立っている気がした。

歌いながら気づいたのは「響き」だった。天井が高いからとか木造だからというだけではない、人肌みたいな温度を持った響きだ。きつとこの町、この蔵の持つ時間が作り出しているものなのだろう。そう感じたらさらに嬉しくなって、曲間でつい長く喋ってしまった。——ジャズ、ポップス、日本の歌等いろいろ……古い時代の曲もたくさん歌っている私たち。とてもいい歌がたくさんあるから。古いから、新しいから、ということではなく、いいと思うものを歌い続けていきたい——。

この夜、古い蔵に“響き”が生まれた



『お気楽ジャズ』と題したクリスマスコンサートは、農協が米や野菜の貯蔵に使用していたという古い蔵で行われた。天井が高く、壁には斜めに木が張られている。キャンドルや手作りの和紙で覆われたランプでライトアップされ、壁の木

方々といろんな話をするのができる演奏終了後、この蔵、この赤岡町の持つ良さを残したいと願っている

た。たった二日間の高知滞在。しかし様々な場面を通して自分たちの大事な原点を新たに再確認でき、そしてまたこんなに充実した濃い時間を共有させていただいたたくさんの人々との出会い。これはなんて幸せ、まさに「宝の時間」だった。

そしてもうひとつ、高知に来て感じたのは、「外国にいるみたい！」ということ。東京へ戻ってから感じた余韻が、まるで海外から戻った時のような……。昼夜の気温差が激しいという気候のせいなのか。おおらかでフレンドリーかつ豪快な方がとても多い！

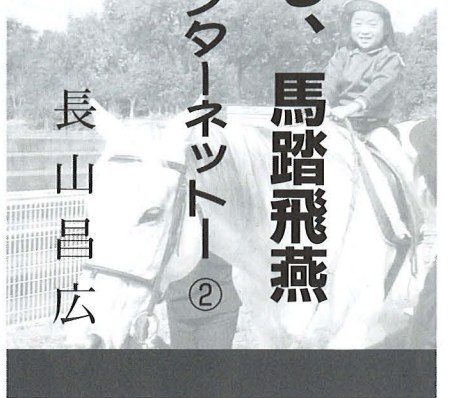
狭い国、日本の中にもこんな面白いところがあったんだなというのも新発見！ またいろんな発見をしに必ず高知を訪れよう。たくさんの元

気がありがとう！

なかむらさち/vocal group Breeze

# 高知を駆ける、馬踏飛燕

## ―馬と園児とインターネット―②



長山昌広

### 高知の馬の職域

「現在高知競馬場では厩務員の募集はやっていないんでしょうか？」というメールが、競走馬診療所の私のパソコンに届いたのは、昨年十一月のことでした。

高知競馬のホームページのウエッブマスターをしていますと、一年間で五千通以上のメールが来ますが、関東在住の十五歳の青年からのこのメールの内容は、私も初めてのものです。さてさて、こんな話を持ってこられても困ったものだと感じながら、本人にとっては大事なことだと思ひ、とにかく調教師に問い合わせをしました。

高知競馬には約百四十人の厩務員さんがおり、採用に関しては主催者

が雇用するのではなく、各調教師さんが直接雇用しています。返事の内容は予想通り。新人の求人はいらないとのことでした。厩務員さんは馬の世話をしたり、競馬の開催日にパドック（下見所）で引き馬をしたりします。明治から続く、高知の伝統ある仕事のひとつなのですが、現在は不況の影響が大きく、新人から育てていくという余裕がないのです。

朝が早いなど条件的に厳しい面があり、基本的に人手不足の傾向もありますが、すぐ馬を任せられる経験者で、やる気のある人を求めているということでした。

話を聞いていきますと、全国の競馬場で求人に関しては厳しい状況があり、関東では事実上経験のない若手の採用は難しいとのことでした。

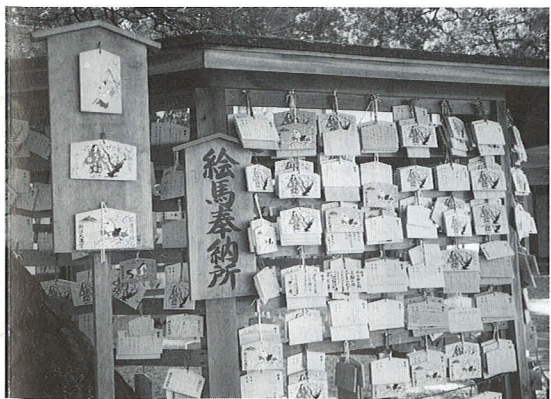
メールが遠く土佐の地にやってきた訳がわかりました。

### 福馬

神社では願い事をしたためた絵馬を神前に献じ奉納します。受験のときなど、誰でも一度は願い事を書いて、ぶら下げたことがあると思いませんか。絵馬は、もともと本物の馬を奉納したことが始まりで、それでは経済的に大変なので、立絵馬（または板立馬）という木製の起立した形状の板を使うようになり、現在の家型の本札の形になりました。

神馬は御神酒と同様に、日本の祭事に当たり前に登場してくる縁起物でした。昔から天候は大事な関心事で、雨が長く続くようなときは「白馬」を奉納して晴れ間を願い、日照りが続くときは「黒馬」を奉納して雨を願ったのです。これが願い事をする絵馬のルーツなのですが、この白馬と黒馬の話は、ほんの少し前の日本人にとっては、誰でも知っている常識的なことでした。

正月の高知新聞に高知の会社のトップの方たちが今年の景気を天気に例えた予想をしていて、コメントを寄せていましたが、大方の本命の予想はといえば、大雨、雨、曇りなど。昨年来、みんなが感じている世の中



話によりますと、障害者乗馬と乗馬療法（ホースセラピー）は、似ているようで、異なるものとのこと。障害者乗馬とは、乗馬を楽しみ、結果として乗馬の効用を得るものであり、乗馬療法とは、基本的に医師が参加して行うものとのことでした。

通常こういう「硬い」内容の話は、どうしても高知の場合、なかなか参加者が集まらないものです。席がたかさん余ることを心配したのですが、ふたを開けてみると、七十人を超える高知県民の参加があり、馬に関する感心の高さに驚かされました。

馬に乗ること。それは本当にほんの数年でも、馬の背に揺られるだけで、現代の生活でまひしてしまっている、自然とともに人がいたときの、体の恒常性という大切なリズムがよみがえります。そう、すっきりするんです。機会があれば、ぜひ、馬上の人となってください。馬と人が数千年にわたって生活を共にしてきた理由が、数分でわかります。

厩務員志望の十五歳の彼は、乗馬

の経験があるとのメールでした。彼も乗馬によって、馬の魅力にとりつかれたようでした。その後ある調教師から、「若い者の希望をつぶしてはならない」ということで、幸運にも声がかかり、今高知競馬に来ています。

関東に住む人にとって、遠く高知に就職することは、高知に生まれ育った人には想像できないほど大きな違和感があります。私は、イメージにとらわれず、就職難の今だからこそ、自分のやりたいことは何か、チャンスは自分で見つけてつかむことを、若い彼から教えられました。過日、競馬場で調教師とともに現れた彼に、「仕事はどうか、朝早いし、きついでしょう」とたずねますと、「厳しいけど、楽しい」との返事。彼からももらったメールの最後にはこう結ばれています。「とにかく自分は馬の世界で働きたい」。前回ご紹介しました中国・武威市の躍進のシンボルとなっている馬踏飛燕の姿を、一瞬見たような気持ちになりました。

馬のこと、なんでもメールください。e-mail: horse@anetne.jp

（ながやまささひろ／高知県競馬組合競走馬診療所獣医師）



▲福馬



▲高知競馬場の中にある馬頭観音

しくありません。日本でも車の前に蹄鉄をつけている人がいますよね。馬は人類にとって、とても特別な動物となっています。

### ホースセラピー

動物介在療法という言葉が最近聞かれるようになりました。わが国では心を患った人をいやすため、犬など小動物を利用して行うことが多いのですが、もともと欧米では乗馬が

人の心と体に快い刺激を与えることが一般に昔から知られていて、動物を介在した「いやし」については、馬とのふれあいがその代表であり、ルーツです。

昨年九月、高知競馬場開業獣医師会は、会の創立十周年を記念して、障害者乗馬の日本で唯一のインストラクターを高知にお招きし、四国で初めて障害者乗馬に関する正しい内容を、一般の方々にお伝えしました。

三年間、はりまや橋商店街振興組合の事務局長、福島哲明氏のご厚意で、作家の皆さんに安価で気軽に使っていた空間作りのお手伝いをさせていただいた。百二十八展示グループ展も含めると約二百五十名の作家さん、そして数えきれないお客様方と知り合うことができ、お陰さまで私も芸大に通っていた頃の何倍もの勉強をさせていただけたような気がしている。

「アトリエよくばり子リス」という名前は、北海道の富良野を舞台としたTVドラマ『北の国から』で有名な脚本家、倉本聰さんの言葉の中から取らせていただいた。「あわて



の美術館で見た親子のように語り合えた日々が、私自身が体験した思い出のように彼の小さな記憶の断片になってくれていたら、それはそれで良かったと思う。今、彼が物を作ったり絵を描いたりする時間が何より好きになれたのは、たくさんの作家さん方に頭を撫でてもらったからだと感謝している。

以前私が勤務していた国際デザインカレッジの卒業生も、よく利用してくれて嬉しかった。若手からベテランまで、バリエーション豊かな展示ができたことは誇れるところだが、どうしても民間企業や個人のギャラリーでは解決することが難しい問題点があった。「一番いい時に退く」「百恵ちゃん」ギャラリーとか言われながら、実のところ私たちは、いつもつまづき悩んでばかりいたのである。

まず「バリアフリー」の問題だ。街の真ん中で交通の便のいいところにあるギャラリーは、地価が高いので、家賃の高い一階にはほとんどない。エレベーターがあるところはまじいいが、階段を上らなくては辿り着けない場所が多いのが現状だ。大好きな作家さんの中には車椅子の方や、ご高齢でご本人もしくは必ず観に来て下さるといふご友人の足が不

# よくばりな「子リス」を卒業して

松田雅子

んぼりスたちが、どんぐりなどの木の実を口いっぱい頬張らせて、野山のあちこちに餌を埋めてゆく。そのままだれられた木の実は、やがて芽を出し育っていく。そういう自然な植林の仕方が山には一番いい。フタを開けてみると、まさに、木造アーケードの中で作家さん方といっしょに、作品という宝物をチョココマカチョココマカと、一体どれだけの数運び入れたり出したりしただろう。一つ一つの展示会での出来事や感動は商店街が発行している『はりまや橋新聞』に連載させていただけなので、これからじっくりとバックナンバーを反芻して、ゆっくり味わいたいと思っている。そして少し頑張りすぎた三年間、無理がいった体が完全に回復するまで、ライフワークの

一つとして楽しみながらまとめていくつもりだ。商店街の倉庫として使用されていた空間に、ある展示では階段に並ぶほどのお客様に来ていただけたたり、報道の皆さんの協力のお陰で、いろんな記事やニュースに取り上げていただいた。驚いたのは高知新聞の記事をインターネットで見たとという人が、わざわざ大阪から来て下さったり、テレビを見て柏島から四時間かけて飛んできてくれたお客様もいらした。安価に使っていただくため、また、毎回ふらっと立ち寄って下さる常連さんを多くするためには、毎週毎週休まず扉を開けておくことがどうしても必要だった。そのためにシーズンオフの時に企画展を考えたり、こ



自由だったりする場合があります、それが理由で使っていただけなかったのは、記録をまとめていく上でも、とても残念なことだ。展示会の様子をビデオカメラマンに撮影・編集してもらい、階段を上れない恩師にどうしても観てもらいたいという作家さんもいらしたし、スタッフが

六時でクロージスしないと、人件費が膨らみ赤字になってしまう。つまりお仕事をされている方が、ゆっくり仕事帰りに立ち寄るといふことができない。こうなると共稼ぎ家庭が多いことで知られる高知県の場合、特に土・日・祝日に、お客様が集中。これまた、ゆっくり作品を鑑賞し、



エスコートさせていただいたこともあったが、とにかく申し訳なく思った。

それと開催時間の問題である。作家さん自身が会場に入ってお客様に対応して下さる展示については、ご本人にお任せすることができたが、企画展の場合では、通常夕方五時か

作家さんと語り合う時間が少なくなるといふ現象が起こる。そんな中、最近美術館が行った金曜日夜八時までの開館は画期的な試みだと思っただけ、新しい施設に期待する気持ちも大きい。

こんなふうには、いろいろな挫折も味わいながら、それでもなんとか続

ちらから県内を歩き回って、気になる作家さんにアタックを重ねた。余談になるが、作家さんの工房に行く時には、できるだけ子どもを連れていった。感性が大きく育つ時期に、実際の物作りの現場の空気に直接触れさせることができ、本当にありがたかった。打ち合わせ中、陶芸家の先生に粘土で遊ばせてもらい、木工の先生に木のおもちゃの作り方を習った。小さな子どもの入場を歓迎してくれる「星ヶ岡アートヴィレッジ」や「グラフィティ」の展示では、子どもに感想を聞くと、思いがけない答えが返ってきたりして、それが一つの楽しみでもあった。いつかパリ

けてこられたのも、地域や商店街の協力があったことだった。お客様に案内状を配ってくれた駐車場のおじさん、お店の方々。前述したが、オープン以来、毎回の展示予定と展示報告を記事にしてくれ、はりまや橋界隈に配布してくれた、はりまや橋新聞。

昨年十二月号から、このはりまや橋新聞の第四面が「子リス」の情報ページから「高知市文化プラザ」かほーと情報」に代わり、子リスこと私も引き続き記事を書かせていただいたり、編集のお手伝いをさせていただけることになった。今後は一緒に子リスをやってきた久万さんと二人、この新聞を配布して回ること、間接的に作家さん方のお手伝いをさせていただき、また地域商店街との一つの交流の場となるよう、ごのごと頑張っていきたいと思う。

今まで子リスを可愛がって下さった方々、最終展示で涙を流して下さった方々、本当にかげがえのない時間を共有して下さって、ありがとうございます。また「はりまや橋」で、お目にかかりましょう。

（まつだまさこ／アトリエよくばり子リス）

写真：岩崎勇  
「SPACE」より

# 上林 暁

## 生誕百周年に寄せて

野並 浩

「久しく憧れていた上林暁の全容に触れることができ感激です。ゆつくり読み返してみたいと思います。」(横浜市・女性)、「一度、来館したい気持ちを抱いていましたが、ようやく今日、思いを果たしました。一層思いが深まりました。」(岡山県・男性)等々。上林暁文学館の観覧者ノートに残された感想の一部である。

私小説の伝統を輝かした作家・上林暁に寄せる直向きな思いが、ひしひしと伝わってくるようである。

高知県の西南部。海辺に沿って四キロにも及ぶ松林が連なる名勝負松原の一角には、「梢に咲いてゐる花よりも 地に散つてゐる花を 美しいと思ふ 上林暁」と刻まれた文学碑がある。私の好きな言葉である。美しく咲き誇っている花よりも、路傍の片隅に儂く散った花をより美しいと思う心情。底辺に温かい視線を注ぐ暁の眼差しに、私は限らない共

感を覚えるのである。

その碑は川端康成染筆による「上林暁生誕の地」の記念碑と、手を携えるようにして太平洋を望んでいる。ところで、いま上林暁文学館では「兄の左手 上林文学とその妹」と題して、晩年の暁を励まし協力した妹・徳廣睦子さんにスポットを当てた企画展(三月三十一日まで)が開催中である。

暁が六十歳の折、脳出血が再発。右半身不随となり、右の手足や口の自由が奪われて以後、十八年間寝たきりの生活を余儀なくされる。その間、睦子さんの献身的な介護と口述筆記に助けられて、暁は創作活動を再開するまでになる。しかし、長引く闘病生活で暁の心身の不調や睦子さんの看病疲れも加わり、原稿の整理や手入れに一時間座っていても前に進めないこともあったと、当時を振り返って睦子さんは述懐している。

やうやくに書き得し兄の原稿の文字の形一つだになき  
清書をする時の睦子さんの筆舌に  
尽くし難い苦労が偲ばれる作である。  
そんな苦難を乗り越えて、大病後  
『白い屋形船』を発表(読売文学賞)。  
さらに『ブロンズ的首』で第一回川  
端康成文学賞を受賞。昭和文壇に不  
朽の名作を残している。

一方、常設展に目を移すと、暁が亡くなる四日前まで4Bの鉛筆を左手に握りしめ、原稿用紙のます目から大きくはみ出した字。と言うより文様とか記号に近い文字で書かれた絶筆『秀夫君』。その上に睦子さんが暁に問い質して記した文字が重なり合い、行間に文学への熱い思いが滲む。

一巡し終えて屋上のテラスに足を運ぶ。ぱっと視界が広がり、周りの松や楠が眼下に一望される。耳を澄ますと潮騒が誘う。テラスの先端には前方を見据えた暁の胸像(久保孝雄作)に出合う。まだ肌を刺す冷たさは残るが、一段と日脚が伸び、明るさを増してきた早春の光。春の足音を感じさせる。

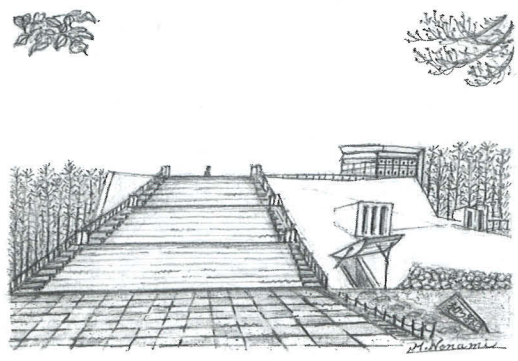
「七度生まれかわるとも、文学をやりたい」と誓った、文学一筋の暁の真摯な姿勢。どんな苦境の中にあっても、明るさを失うことなく人間

の善意を信じた上林暁。その片腕となり最後まで上林文学を支えた通した睦子さん。

「自らを励まし、鞭打ち、渾身の力をこめて4Bの鉛筆を握っていた、ありし日の姿を思い浮かべ、胸が痛んだ。兄の文学への執念が、一生がここ(絶筆『秀夫君』)に凝縮されているような気がした(略)」。徳廣睦子さんの手記「兄の左手」の終わりの文章である。

十月六日には、大方町主催による「上林暁生誕百周年」の記念行事が行われる。

(のなみひろし／上林暁文学館協  
議会委員長)



上林暁文学館(筆者スケッチ)

# 音楽と私



社会と学校と音楽とともに 川田弘人

私は今、高知県教育センターという教育委員会の出先機関に籍をおいて、主に小・中・高等学校の音楽教育について研究をし、研修を計画したり、講師として県下を回らせていただいている。

ある企業の資料によると小学校の音楽の授業は、好きな授業の第三位でありながら、嫌いな授業の第四位でもあるという。他教科と違って好きと嫌いに大きく分かれる教科だと言えよう。私にとつての小学校時代の音楽は嫌いな教科の第一位だった。しかし、音楽そのものは大好きだった。だからといってピアノを習っているとただでなく、単に歌を歌うのが好きだっただけだ。だから、今の子どもたちの心境はなんとなく理解できる気がする。嫌いにさせていた原因は、「あんなに楽しい音楽をなぜこんなに難しく勉強しなくちゃならないんだらう」ということだった。

さて、小・中学校では平成十四年度から学校週五日制、総合的な学習の時間、教科の時間削減：いわゆる新しい教育課程、新学習指導要領が本格実施となる。  
新しい学習指導要領は告示まで二つの審議会を経て、様々な議論がなされ、作成されていった。中央教育審議会では、「音楽の授業はもう必

修教科でなくてもいいのでは？」という議論もあったそう。しかし、選択授業になると、学級で一緒に歌ったり演奏したりする機会が少なくなってしまう。では必要性について誰もが納得できるよう、きちんとした文言で示せ、となるとこれもまた難しい。音楽の授業は不必要とも必要とも言い切れない存在だから、結果的には必修教科として存続した経緯がある。

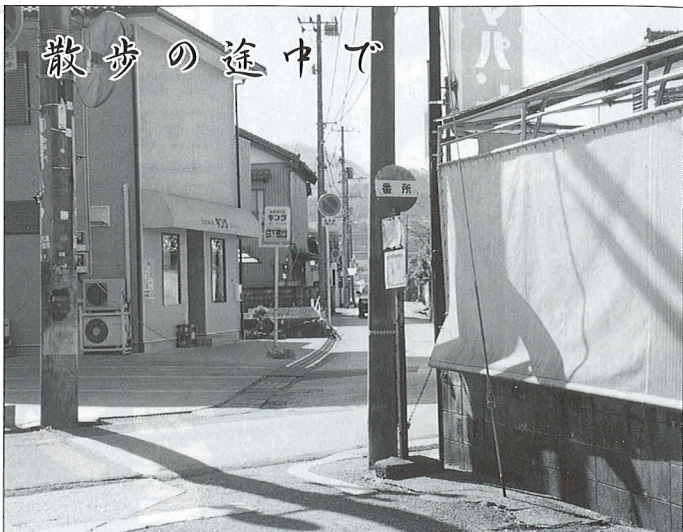
私が今の仕事をして五年が経過した。先生方や児童生徒と一緒に音楽を楽しみ、楽しさを失わないことを前提に、音楽を通して生きていくことの意味、音楽の存在の価値、生涯に繋がる音楽とのつきあい方について一緒に学んできた。それが児童生徒の生き方にどう繋がっていくかはまだわからない。音楽教育は、人の成長そのものに大きく関わるものだから、短期間で成果が見えることは少なく、徐々に変わっていくだろう。

学校の音楽の授業は必要性を問題にすれば、軽視されるかもしれない。でも、人を結びつけ、自分でも気づけないパワーを引き出せるものを扱っている授業だということは今はずきりと認識したい。私は、学校以外でも歌唱や合唱について指導をする

機会が多い。それらの指導も私にとつては、学校の授業と基本的に同じだ。高校現場にいた時も、一般の合唱団の指導の中から授業での教え方についていくつもヒントを与えられたし、落ち込んでいた時には励ましとなった。音楽は、時に優しく、時に厳しく、私に力を与えてくれた。振り返ると、それらすべての活動が人と人とのコミュニケーションの手段として、また、自分の中の美学として育まれていったことを感じるし、これからもまだまだ学ばなければならぬことがたくさんある。

今までの仕事をしていた、ほんやりとしか感じていなかった音楽の必要性を深く考えるようになり、以前よりは必要性をはっきりと感じることができるようになった。これからは「学校だ」、「社会だ」などと言わず、もっとたくさんの人と音楽で交流をしていくことが大切ではないかと思う。歌うことで人と人が結びつき、ささやかでも人間性や信頼を復活させてくれるだろう。そして、それは誰にでも幸せをもたらし、自らを成長させてくれることを確信している。

かわだひろひと／高知県教育センター指導主事・川田音楽研究  
会代表



高知大学のやや南東に「番所」という名のバス停がある。土佐藩内の幹線道路に配置されていた送(おくり)番所のひとつがここにあったという。お城下の西の玄関口に当たる朝倉村は、往還の要所であり、送番所は郵便局や駅の役割をしていた。荒倉峠を越える旅人が往来し、多くの荷物が運び込まれる送番所はたいへん混雑していたともいう。名のみに残る史跡である。

## 風俗

### 口ヒゲ

将のように剛健さを表す必要も無い。まして役人が威厳を示す必要も無いが、ヒゲにも流行り廃りがあるようで、外務官僚を例に挙げるまでもなく、今はちょうど流行の時期に当たるようである。かく言つ私もヒゲを生やしているので、口ヒゲを生やしている人の思いは分からないでもない。

人はなぜヒゲを生やすのか。昔の日本では生えるに任せていたそうだが、時代が下って、中世には威厳を必要とする役人たちがヒゲを蓄えていたようであるし、戦国時代はヒゲが強さの象徴であった。では現代はどうかというと、ヒゲを蓄えなければならぬ宗教的背景も無いし、武

あくまでも私の場合であるが、我ながらのべつと平面的な顔で、なかなか人に記憶してもらえないくらいがある。別にそれならそれでもかまわないが、ヒゲを生やせばもう少しマシンに見えるのではないかと、密かな願望があったことは確かである。ある時は「いやあ、無精ひげですよ、アツハツハ」とか「寒い間の期間限定ヒゲですよ(生ものじゃあるまいに)」とか言つて誤魔化しているが、正直に言えば、女性から「あら〇〇さん、おヒゲが似合ってますしやること、ホホホ」などと言われると、悲しいかな、ついつい口元がゆるんでくるのをどうしても隠せない。現代日本人の口ヒゲがどう見ても助平面に見えるのは、きつとそんなやましい下心があるからではないのかと思うのだが、それはもちろん、私ひとりのことである。(髭仙人)

## 第1回「詩のボクシング」高知大会 朗読ボクサー募集

「詩のボクシング」とはボクシングにみたてたリング上で、二人の朗読ボクサーが自作の詩(俳句・川柳・短歌等も可)を朗読しあい、どれだけ観客をひきつけたかを競い合う〈言葉の格闘技〉です。現在予選会への出場者を募集中です。奮ってご応募ください。

### 【予選会】

平成14年3月31日(日) 午後2時  
高知市文化プラザ小ホール  
参加費：500円  
審査員：楠かつのり氏

(日本朗読ボクシング協会  
代表)ほか

申込み〆切：3月18日(月)必着  
応募資格：高知県内在住で15歳以上の方(ただし4月28日の本大会に出場可能な方)  
詳しくは文化振興事業団企画事業課(088-883-5071)へお問い合わせ下さい。

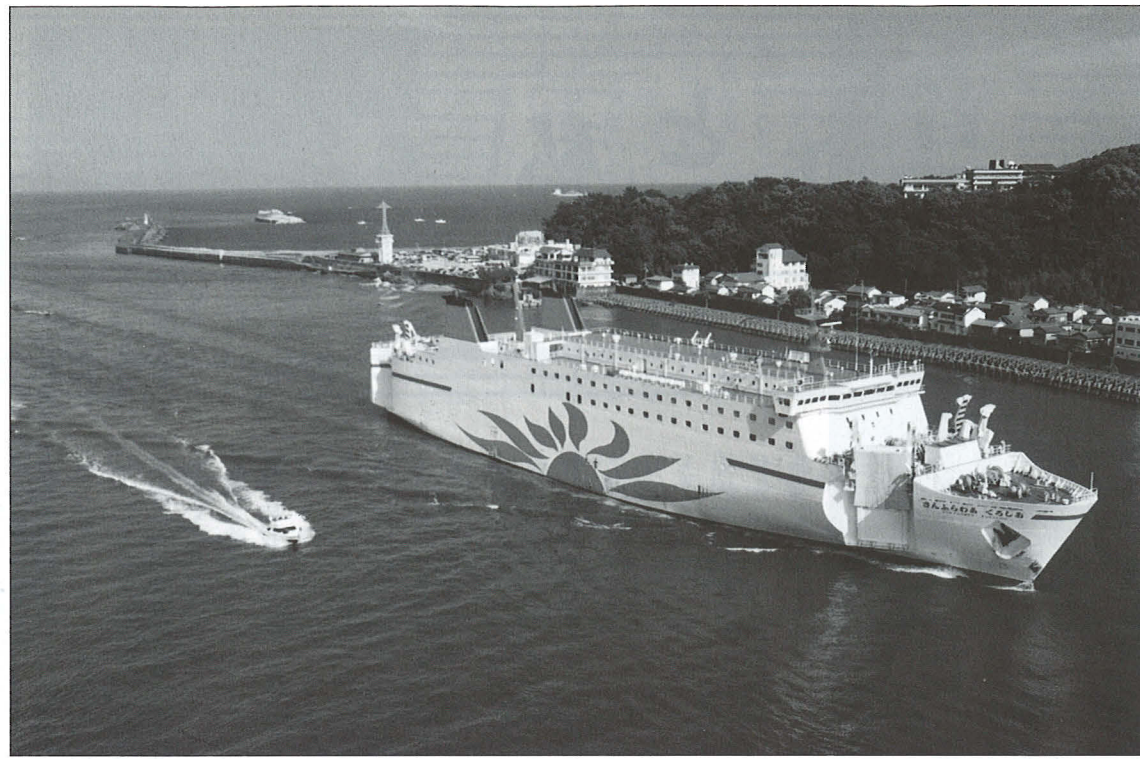
### 【本大会】

平成14年4月28日(日) 午後1時  
高知市文化プラザ小ホール  
入場料 1500円/自由席



## 今号の表紙

「エサクウカラスダダズ」石井葉子  
額を窓にみため、鳥と自分をダブらせた大学4回の頃の作品です。籠が開いても餌をくれるので飛ばない鳥。外を覗んで部屋から出ない私。友達が就職活動をする中、大学院の受験を決めたこの時期、それは意欲あることだけど、実社会から距離を置いて、自力で生活しない後ろめたさも感じていました。その私もこの3月、大学院を修了します。(いしいようこ・高知大学大学院生)



高知を撮る さんふらわあ (平成12年 高知市) 竹崎幸典

柱浜を背景に入港するさんふらわあ。平成13年秋をもって運航中止となり高知から姿を消した。

第17回写真コンテスト入賞作品

いよいよ、高知市文化プラザ「かるぼーと」の開港である。文字どおり、文化を満載した船の出船、入船で賑わってほしい。

それにも心憎いネーミングである。平仮名の使用で、語感が丸く、音も耳に心地よく響く。とりわけ、CULとPORTとの間のハイフンが不思議な効果をもたらし、公共施設の名前に外来成語を使うのはかなり以前からの流行だが、中には首を傾げなくなるようなものも多い。特に気になるのが、やたらとピア(Pear)をつけたがる傾向である。

この言葉は恐らく、理想郷を意味するユートピア(UTOPIA)にあやかって、その語尾を頂戴したと思われるが、頂戴するならTOPPIAと五文字で初めて「場所」という意味をもつ言葉になる。別にネーミングが原因でつぶれたわけではないが、「グリーンピア」と名付けられた施設があった。ハイフンのもつ意味も大きい。高知の街で「SHINYOKINKO」と

## CUL-PORT



### 風俗歳時記

この標識のある立派なビルにお目にかかった人は多いと思う。折よく、前をバキュームカーでも通り過ぎようものなら、立派な漫画である。SHINとYOとの間のハイフン一つで「信用」が違ってくる。純一郎君もイチローにあやかるとともに、JUNIORCHIROと書かないとジュニローになってしまふ。

CULとPORTとの間にハイフンを入れることにより、CULもPORTもそれぞれの存在を主張しているかに見える。

CULのカルチャーはもともと、「耕す」という意味である。「耕す」のは、種を蒔くのより先である。花を買ってくるのでも、苗を育てるのでもなく、じっくりと本物の文化を土から作りあげる拠点になってほしい。折しも世の中では「軽便(コンビニ)」、「即席」、「既製」万能の生活スタイルが見直されようとしている。港への期待は大きい。(路)





2002  
4/9 [火] 19:00開演 (18:00開場)  
高知市文化プラザ大ホール

program モーツァルト:交響曲第36番「リンツ」 マラー:交響曲第1番「巨人」

S席 ¥13,000 (¥9,100) A席 ¥11,000 (¥7,700) ※バルコニー席は完売いたしました。  
( )内の料金は身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名の料金です。

前売り券発売所 高知市文化プラザ・高新プレイガイド・高知大丸プレイガイド・高知西武  
デュークショップ・高知県民文化ホール・高知県立美術館ミュージアムショップ

【通信販売】直接購入が出来ない方は通信販売をご利用ください。必ずお電話(088-883-5073)にてご予約の後、  
郵便振替口座【加入者名:(財)高知市文化振興事業団 口座番号:01680-5-14869】に  
公演名・券種を明記の上、チケットの合計金額と送料430円を合計した金額をご入金ください。  
入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

450年以上の歴史を持つ世界最古のオーケストラ。  
ウィーンフィルと並びオーケストラの名門。

—— ジェイムス・コンロン指揮

# ドレスデン 国立歌劇場管弦楽団

Sächsische Staatskapelle DRESDEN



かるぼーと  
開館記念事業

5月3日[金]~5月26日[日] 9:00~19:00  
高知市文化プラザ市民ギャラリー

## 華やぐパリの芸術家たち

~印象派、エコール・ド・パリから現代までの足跡をたどる~



チケット  
好評発売中

一般 前売/800円  
当日/1,000円  
中高生 前売/400円  
当日/500円  
小学生以下無料

【展示】19世紀から20世紀のフランス絵画の流れを、  
コロー、モネ、フジタ、モディリアーニ、マティスなど40人を超  
える巨匠たちの作品80余点で展覧する。

5月8日[水] 19:00開演  
高知市文化プラザ大ホール

## 亂★打 NANTA (ナンタ)



【ミュージカルパフォーマンス】鍋が包丁がリズムを奏でる—韓国の伝統のリズム・サムルノリを取り入れた、  
韓国ソウル発、ブロードウェイ経由のキッチンエン  
タテイメント。ナンタとは「乱打」のこと。人気パ  
フォーマンス、四国初上陸。  
S席/5,500円・A席/4,500円  
第2バルコニー/3,000円・第3バルコニー/2,500円  
第4バルコニー/2,000円

■主催:高知市・(財)高知市文化振興事業団 ■事業に関するお問い合わせ/(財)高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071